

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370012

研究課題名(和文) 明治期の東京大学における印度哲学および支那哲学講義の思想的意義

研究課題名(英文) The significance of lectures on Indian philosophy and Chinese philosophy at the University of Tokyo in Meiji period as philosophical thought

研究代表者

鈴木 朋子 (SUZUKI, Tomoko)

お茶の水女子大学・基幹研究院・研究員

研究者番号：90622069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：1888(明治19)年から翌年にかけて、東京大学で吉谷覚寿(1843-1914)が行ったインド哲学(仏教学)、および島田重禮(1838-1896)による中国哲学の講義内容を筆記した高嶺三吉の直筆ノートを翻刻、分析した。その結果、これらの講義には、二つの思想的意義があることが明らかとなった。一つ目は、西洋思想を重視する傾向にあった当時の状況に対し、仏教と中国哲学を西洋哲学に比肩するものと位置付けるための基礎を与えたという点である。第二に、受講生の一人であり、後に近代を代表する宗教哲学者、仏教思想家として活躍した清沢満之(1863-1903)の思想形成における素地となったという点である。

研究成果の概要(英文)：We have completed analysis about the contents of the notebooks written by Takamine Sankiti 高嶺三吉 from 1888 to 1889. He wrote two notebooks about two courses of lectures conducted in the University of Tokyo around that time: one was the Indian philosophy (Buddhology) by Yoshitani Kakuju 吉谷覚寿 and the other was the Chinese philosophy by Shimada Chourei 島田重禮. As a result, it became clear from Takamine's notebooks that their lectures played two important roles in the Japanese of coming age. Primally, contrary to the trends that European philosophy was considered to be most important to study, Yoshitani and Shimada advocated that Buddhology and Chinese philosophy should be treated as equal to European philosophy. Secondly, their lectures influenced Kiyozawa Manshi 清沢満之 of the university student, who was a Japanese expert in the philosophy of religion and the Buddhist thinker.

研究分野：日本倫理思想史

キーワード：仏教学 中国哲学 清沢満之 吉田覚寿 島田重禮

1. 研究開始当初の背景

1881(明治14)年、東京大学文学部では、「哲学政治学及び理財学科」から「哲学科」を独立した学科とし、正式科目の一つとして印度哲学と支那哲学が置かれることになった。以後、明治二十年にかけて哲学科に在籍した学生からは、井上円了(1858-1919)、三宅雪嶺(1860-1945)、清沢満之(1863-1903)等、多くの思想家が巣立っており、これらの講義が彼らの思想形成に及ぼした役割を看過することはできない。

しかし、従来の研究では西洋哲学の学びという面に関心が集中する傾向にあった。例えば、大谷大学真宗総合研究所(京都府京都市小山北総町)では、池上哲司を代表とする研究班において、東京大学での西洋哲学の講義内容を記した清沢満之(1863-1903)のノートを翻刻・分析が進められている。この作業を通じて、外国人教師を媒介とした西洋哲学の受容様態を明らかにすることが、その目的である。

また、印度哲学の講義に目を向けた数少ない研究としては、渡部清「仏教哲学者としての原坦山と「現象即実在論」との関係」がある。渡部は、印度哲学の初代講師であった原坦山(1819-1892)が、仏教を哲学とみなして考究する道を定めた結果、その教えを受けた井上哲次郎(1856-1944)、井上円了(1858-1919)、清沢満之、三宅雪嶺(1860-1945)らによって、後に「現象即実在論」と呼ばれる「日本主義的哲学」が出現したのだと論じている。

以上のように、池上研究班は西洋哲学に、渡部は原坦山による印度哲学の講義に着目し、各々の科目を受講した学生の思想形成過程について究明している。しかし、原以外の講師が行った印度哲学や、支那哲学の講義内容とその受容様態については、十分に解明されていない。

2. 研究の目的

- (1) 明治期の東京大学で行われた吉谷覚寿(1843-1914)による印度哲学講義の内容について、その一部を明らかにする。
- (2) 明治期の東京大学で行われた島田重禮(1838-1896)による支那哲学講義の内容について、その一部を明らかにする。
- (3) (1)、(2)の受講者の一人である清沢満之の思想における受容様態を考察し、印度哲学と支那哲学講義の思想的意義について、その一側面を解明する。

3. 研究の方法

(1)(2) 吉谷と島田の講義内容を筆記した高嶺三吉(1861-1887)の自筆ノートを翻刻・分析する。高嶺の筆記したノートは、吉谷、島田の講義の他、榊俣の「精神病学、解剖学及生理学」、フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa)、ノックス(George William Knox)、ブッセ(Ludwig Busse)による「哲学」

「倫理学」「審美学」「社会学」などがある。これらの講義ノートは、計七冊から成り、『高嶺遺稿』と名付けられ、金沢大学付属図書館に所蔵されている。本研究では、このノートをデジタル化したもののコピーを入手し、翻刻した。次に、吉谷と島田が執筆した論説・著作・周辺資料を調査・収集し、これら进行分析した。

(3) 大谷大学編『清沢満之全集』(全9巻、岩波書店、2002-2003年)に収録された清沢の論説・著作・日記・書簡等を精読・分析した。

4. 研究成果

(1) 吉谷覚寿は、美濃海津にある浄厳寺の生まれであり、1877(明治10)年に真宗大谷派の教育機関である東京教校の教授に就任した。1881(明治14)年より、東京大学文学部哲学科の講師として、印度哲学を担当することになる。そのいきさつについては、東京小石川戸崎町にある念速寺の近藤という住職が加藤弘之に対し、「坦山和尚は禅門の悟道の方にて、教相学者にあらず。殊に天台などは全く学びたることなき人なり。因て今一入教相専門学者の増聘せられ度由を申上げ」吉谷が招聘されたという。

ところで、印度哲学という科目は、それまで選択科目とされていた仏書講義を改称したものであり、実質的な内容は仏教学である。したがって、吉谷が行った講義は、『八宗綱要』と『天台四教義集註』を用いた仏教概論となっている。

『八宗綱要』は、鎌倉時代の擬然(1240-1321)の著書で、仏教が伝播した歴史と八宗(俱舍宗、成実宗、律宗、法相宗、三論宗、天台宗、華嚴宗、真言宗)の歴史および教理が簡潔に説かれたもので、八宗の教理の概要を知ることのできる入門書とされている。つまり、吉谷はまず『八宗綱要』によって、仏教の歴史と各宗派の教理についての基礎知識を講義したのである。その内容については、1885(明治18)年に、井上円了が記録したものとされる講義ノートの翻刻が、佐藤厚「井上円了『八宗綱要ノート』の思想的意義」(『井上円了センター年報』第22号、2013年)141-165ページに収録されている。

また、八宗の中でも日本仏教の母体となったものが、天台宗である。そこで、吉谷は次に天台教学の基礎知識の修得を目的として、『天台四教儀』の注釈書である『天台四教儀集註』を講義した。『天台四教儀』は、高麗の諦観(?-971)が執筆したもので、天台宗における教義の大綱と実践修行の概略を述べたものである。また、天台に限定せず、仏教一般における教義もあわせて説いているので、仏教そのものの入門書としての意味ももっている書物である。

『高嶺遺稿』に記された吉谷の講義は、蒙潤(1275-1342)による『天台四教儀集註』を

日本語訳し、頭注を施した木村恵満冠註『天台四教儀集註』（出雲文三郎、1883年）をテキストにしたものとみられる。また、吉谷は、後に大谷教校でも『天台四教儀集註』を講義しており、その手控えに筆を加えたものを1898（明治31）年『天台四教儀集註略解』として出版している。『高嶺遺稿』の大半は、この著書の記述と合致している。

しかし、『天台四教儀集註略解』は、『天台四教儀集註』の上巻、中巻、下巻のすべてにわたって順次、解説がなされているのに対し、『高嶺遺稿』によると、上巻、下巻の順に講義がなされており、中間の記述がない。

その理由については、『東京大学第三年報』（明治15年9月～明治16年6月）によると、前年度に行った『八宗綱要』の講義では、第三期にあたる四年生のとき「深高の要義」を述べた部分を解説しようとしたところ、卒業論文執筆のため、欠席する者が少なくなく、肝心な部分を十分に理解させることができなかった。そこで本年度は「教科書の四教儀を三分し首段を第一期に後段に第二期に中段を第三期に講授せり。是れ他なし。四教儀は前後に深高の要義を明かにして中間に浅近の法門を述たる書なるか故なり。」とある。したがって、明治19年からなされた授業でも同様に、まず「深高の要義」を明らかにしている上巻と下巻を講義し、続いて中巻を講義する予定であったが、進度により時間が不足したため、上巻・下巻のみで終了したものと推測される。

また、その講義は、計82の項目を立て、各々について解説するというスタイルをとっている。これは、『文科大学年報』（明治18年～明治19年12月）に『八宗綱要』を講義するにあたって、「一百番の科目を立てて先之を略して筆受令め、而して後反復弁明して其奥を得令めんとす」と述べられていることから『天台四教儀集註』を講じる際にも同様の方法を用いたものと考えられる。『高嶺遺稿』では、巻一（明治19年9月25日から）に第1義から34義、巻二（明治20年1月29日から）に第35義から62義、巻三（明治20年4月9日から）に第63義から82義が記されている。なお、81義の記述が欠けており、これは高嶺が欠席したためかと思われる。

(2) 島田重禮は、漢学者として1874（明治2）年、東京師範学校（現筑波大学）で教職に就き、1884（明治12）年に東京大学文学部の講師として着任し、1886（明治14）年に同校の教授となった人物である。島田は、文学部において、漢文学と支那哲学を担当した。また、1891（明治19）年、東京大学が帝国大学へと組織改編すると、帝大文科大学において、経学・支那歴史・支那哲学・漢文学・支那古代制法の教授となり、漢文学部の主任に就任している。

『高嶺遺稿』における島田による支那哲学

の講義記録は、1891（明治19）年1月から翌年5月にわたるものである。その内容はいわゆる「中国哲学概論」の体裁で書かれており、大きく「総論」部と「各論」部とに分けることができる。

「総論」には、中国思想の代表的な概念として「性」と「道」が取り上げられている。「性」については、中国思想における各説を、単語もしくは短文の引用により紹介するという形をとっており、内容は詳細に書かれていない。そして、「性」についての孟子・荀子・程朱等の説が、西洋哲学におけるいずれの説に類するものかが示されている。一方、「道」については、西洋哲学との比較はなされておらず、孔子における「天」の概念を、「人道」との距離を大きく持とうとする理解がみられるという特徴がある。

「各論」では、孔子や孟子にはじまり、北宋の二程子・張載まで、儒教に限らず中国の主要な思想家についての人物伝とその思想の特徴がまとめられている。注目されるのは、『莊子』の中から「斉物篇」、程明道においては「識仁篇」を中心課題としていという点である。そして、中国思想の流れを五期に分類し、漢や隋、唐の儒者を低く位置づけるといった傾向がみられる。

(3) 東京大学において、印度哲学という科目は、1878（明治11）年までは「和漢文学科」において仏書講義として開講されていたものであり、支那哲学も同様に、「和漢文学科」の科目であった。この「和漢文学科」が設立された目的について、法理文学部総理の加藤弘之（1836～1916）は、次のように述べている。

和漢文ノ一科を加フル所以ハ、目今の勢、斯文幾ンド寥々晨星の如ク、今此ヲ大学ノ科目中ニ置カザレバ、到底永久維持スベカラザルノニナラズ、自ら日本学士ト称スル者の唯リ英文ニノミ通ジテ、国文ニ茫乎タルアラバ、真ニ文運ノ精美ヲ収ムベカラザレバナリ。（文部省への「伺書」明治10年9月）

この文章から、和漢文学科に対する要請は、和漢書の研究活動の衰退に対する危惧から発せられ、また維新後の欧米諸学の摂取ということに邁進しすぎた学問方針に対する反省としてあらわれているといえる。

そして、1881（明治14）年、「政治学及理財学科」から「哲学科」が分離した際、それまで選択科目であった仏書講義は印度哲学と改称され、支那哲学と共に正式科目とされた。さらに、翌年、印度哲学と支那哲学を含む東洋哲学という科目が増設され、仏教学と中国哲学は西洋哲学と同等に位置づけられることになった。こうした科目編成の改変は、最高学府である東京大学において、仏教学と中国哲学は、将来国家を担うことになる学生が学ばなければならない科目であると、認められたことを意味する。

このことは、僧侶である吉谷にとっても、

漢学者の島田にとっても、歓迎すべき出来事であったといえるだろう。そこで、吉谷は『天台四教儀集註』をテキストとし、修行のみならず教説の理論的究明を肝要とする天台教学を解説した。当時、仏教の思想は合理性を欠くものであり、近代という時代においてもはや必要のないものであるとみなされる傾向にあったが、吉谷は『天台四教儀集註』を通じて、仏教は西洋哲学に匹敵する理論的内容をもつものであることを示そうとしたものと考えられる。

また、島田は、中国の各思想を西洋思想と比較し、緩用するという形で解説した。つまり、哲学という西洋学問を摂取しつつ、それに並ぶものとしてアジアの思想を位置づけようとするときの基礎講義が、支那哲学講義であるといえる。したがって、両者の講義における思想的意義の一つは、西洋思想を重視する傾向にあった当時の状況に対し、仏教と中国思想を西洋哲学に比肩するものとして位置づけるための基礎を与えたという点にある。

さらに、両者の講義内容に目を向けると、まず、吉谷の講義した天台教学において中心とされるのは、「空仮中」および「十界互具」という概念である。前者は、事物には実体がないため「空」であるが、仮に現象しており、「空」と「仮」とのいずれに偏らない「中」という見方の体得を説くものであり、後者は人や仏など異なる世界が相互に具することを説くものである。また、島田は、『莊子』の中から「斉物篇」、程明道においては「識仁篇」を中心課題としているが、両者には、自己と他者とは一つのものであり、他者の痛みを自己の痛みと感じる「万物一体の仁」が説かれている。

ところで、島田と吉谷の講義を受けた学生の一人である清沢満之の思想的基盤となっているのは、あらゆるものは区別をもつ有限でありつつ、無限という一体のうちに包摂されているという万物一体論である。そして、清沢は、我々が有限と無限という異なる側面を具すものであり、差別と平等といういずれにも偏らない立場から、その倫理思想を展開した。つまり、万物一体論という清沢の思想的基盤は、吉谷と島田の講義を素地の一つとして形成されたものなのである。

清沢の万物一体論は、大学時代に学んだヘーゲルやスペンサーといった西洋哲学と共に、仏教学や中国哲学を背景としていることは、先行研究においてすでに指摘されている。本研究においては、高嶺三吉の講義ノートを翻刻することにより、清沢が学んだ仏教学と中国哲学の具体的内容を明らかにし、それらが清沢の思想形成の背景となっていたことを裏付けることができた。

引用文献

渡部 清、仏教哲学者としての原坦山と「現象即实在論」との関係、哲学科紀要、

巻、1998、89 113

井上円了、加藤老博士に就きて、東洋哲学、22 編 7 号、1915、13

東京大学史資料研究会、資料叢書東京大学史 東京大学年報、2 巻、1993、248

同上、5 巻、1994、135

東京大学百年史編集委員会、東京大学百年史 部局史一、1983、503

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

鈴木 朋子、吉谷覚寿における仏教復興の道、近代仏教、査読有、23 巻、2016、81 100

鈴木 朋子、明治中期の護法思想 吉谷覚寿の場合、倫理学研究、査読有、6 巻、2014、1 8

[学会発表](計 4 件)

徳重 公美、荻生徂徠の思想における「聖人」の位置づけと丸山真男の「近代」、二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業国際シンポジウム、2016 年 3 月 12 日、倉敷市美術館(岡山県倉敷市)

鈴木 朋子、吉谷覚寿における学問と宗教、日本宗教学会、2015 年 9 月 5 日、創価大学(東京都八王子市)

徳重 公美、近代日本の儒教思想 島田重禮「支那哲学」講義をてがかりに、日本思想史学会、2014 年 10 月 25 日、愛知学院大学(愛知県日進市)

鈴木 朋子、人生の意義とは何か 清沢満之の思索、日本宗教学会、2014 年 9 月 14 日、同志社大学(京都府京都市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 朋子(SUZUKI, Tomoko)
お茶の水女子大学・基幹研究院・研究員
研究者番号: 90622069

(2) 研究分担者

徳重 公美(TOKUSHIGE, Kumi)
お茶の水女子大学・文教育学部・アカデミック・アシスタント
研究者番号: 00648884